

サンプル文章・本文より抜粋です

年末が差し迫ってきて、街中はクリスマスと年越しムードが混在している。
無事特待生への承認が行われて、香穂子は安堵の中にいた。
ただ一つ、心に棘のようにひっかかる懸念を除いては――

時節柄外での練習は寒いし、通常時程の中では音楽科の予約でいっぱいな練習室が空いているので、そこを借りてずっと弾くことができる。

練習室のドアを開けようとする、そこでばったり土浦と出くわした

(中略)

理事長室に連れ込まれた香穂子は、吉羅が内鍵をかけるところを見ていた。

「さっきは、土浦君となんの話をしていたのかね？」

「……とぼけないでください、理事長。聞いていたんでしょう？」

「おや、心外だな。私が君達の話盗み聞きしていたとでも？ たまたま君達の会話が洩れ聞こえてきただけだよ。防音とはいえ、楽器も演奏せず扉の近く、それも小窓の傍での声ならば外に洩れてしまうのは自然なことだ」

黙った香穂子の腰を抱き寄せて、吉羅が軽く唇を合わせる。

(中略)

「そう……ですね。もとは五人もいる家だから、たまに一人になりたいと思っても、夜中も朝もずっと一人きりなのは……怖いかも」

香穂子が独り言のように言い終えると、吉羅に力強く肩を抱き寄せられて、耳元に囁かれた。

「今夜は、ずっと一緒にいよう。君に寂しい思いはさせない」

まるで恋人同士の交し合う言葉のように、甘い囁き。

(中略)

――君らしくて、好ましいね。

――今夜は、ずっと一緒にいよう。寂しい思いはさせない。

――ネクタイの結び方を覚えてもらわないと困る。

――私だけを見つめて、という意味だ。

――これは犯罪だ。怖いかな？

吉羅の言葉の数々がリフレインされる。

(中略)

「可愛いことを言ってくれるね。……そんなことを言われると、また君をひどい目に遭わせてしまいそうだよ」

「えっ……」

「離したくなくなってしまうね……今夜はもう、時間がないが」
微笑を浮かべたままの彼の瞳が、香穂子の体のあちこちを這い回っているのがわかる。

「折りよくホテルにいて、舞台装置は整っているのに。——帰したくない」
テーブルに載せた香穂子の手を握られ、真顔で迫られると、香穂子は戸惑いが大きくて何も言い返せなかった。

(中略。以下、書き下ろしで理事長視点より)

彼女が素肌の上にシャツを羽織ったしどけない姿で私に近寄り、この部屋から見える風景は雄大だけど、寂しく見えるなどと言い出したのだ。

私にとって、ここは寝るためと休息するためのスペースだ。

寂しいなどの想いを抱いた覚えはなかった。

眺望のよさは気に入っているが、窓外のビル群にある種の感慨を抱いたことはあっても、大きく心を揺さぶられた記憶はない。

少女らしい感傷的な言辞に、私は苦い笑みを浮かべた。

不意に意地悪い言葉をかけてみたくなる。

「で、——私が寂しいと言えば、君はここに居てくれるのかね？」

宿泊を命じられたから、明日の夜までという極めて真っ当な返答があった。

私が寂寥を抱えているからといって、それを引き出してなんになるのだろう。

寂しいから力づくで彼女を傍に置きたがっていると、そう思いたいのか。